

# 万葉集2006番歌の「告げに」の解釈について

竹生 政資<sup>1</sup>, 西 晃央<sup>2</sup>

## An Interpretation on the Expression “Tsugeni” in the 2006th Poem in Manyō-shū

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

### 要 旨

万葉集2006番歌は、原文の訓読については諸本とも「彦星は 嘆かす妻に 言だにも 告げにぞ来つる 見れば苦しみ」でほぼ一致しているが、解釈についてはまだ問題が残されている。最近の万葉集注釈書、例えば新日本古典文学大系本は「彦星はお嘆きの妻に言葉だけでも告げようとして来た。見ていると辛いので」と解釈しているが、本文中でも指摘するように、このような解釈には問題がある。一方、約40年前に出版された日本古典文学大系本は、本文では上とほぼ同じ解釈をとりながら、脚注に「この歌、難解で諸説がある」とコメントした上で、補注で「彦星は別れを嘆く織女星に、言葉だけでもかけずに別れて来た。織女星を見ると苦しいから」という別の「一試案」を提案している。

本論文では2006番歌の解釈を再検討し、第四句「告げにぞ来つる」の「に」は通説のように助詞と解するのではなく否定の助動詞「ず」の連用形（上代特有の用法）とみる解釈、すなわち日本古典文学大系本が補注で提案した「一試案」の解釈こそが適切な解釈であることを論証する。

### 1. はじめに

この論文で取り上げる万葉集2006番歌は、巻十の「秋の雑歌」に分類された歌のうち、「七夕」という題詞をもつ九十八首（1996番歌から2093番歌まで）の中の一詩である。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本にしたがって掲載する[1]。

10/2006 彦星は 嘆かす妻に 言だにも 告げにぞ来つる 見れば苦しみ

【原文】 孫星 嘆須嬬 事谷毛 告尔叙来鶴 見者苦弥

原文の第四句「告尔叙来鶴」は底本（西本願寺本）では「告余叙来鶴」となっているが（二番目の字が「尔」ではなく「余」）、底本のままで訓むと「告げよぞ来つる」となり意味をなさないため、「余」の字とよく似た「尔」の誤字と見なし「告尔叙来鶴」と原文改訂した上で「告げにぞ来つる」と訓読されている。

<sup>1</sup> 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

<sup>2</sup> 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

この原文改訂は正当であり、ほかの句の訓読についても特に問題はない。この歌で問題があるのは、歌の解釈に関する部分、特に第四句「告げにぞ来つる」の「告げに」の部分である。

以下、次の第2節ではまずこれまでの先行研究を示した上でそれらの問題点を指摘し、続いて第3節ではそれらの問題点を解決できる新しい解釈を提案する。

## 2. 先行研究とその問題点

この節ではまず、2006番歌に関する過去の研究内容を知るために、これまでに出版された代表的な万葉集注釈書に掲載されている歌の注釈と解釈（大意）を出版年の新しいものから順に掲載する。原文と訓読文については各注釈書とも前節に掲載したものとほとんど同じであるので省略した。また、記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更した。

### ①新日本古典文学大系の解釈<sup>[1]</sup>

【注釈】「告げにぞ」は、「告げむとぞ」の意。「告げむとぞ来つる」では、字余りになる。作者の想像が、第二句「嘆かす妻」という敬語に反映している。

【大意】彦星はお嘆きの妻に言葉だけでも告げようとして来た。見ていると辛いので。

### ②新編日本古典文学全集の解釈<sup>[2]</sup>

【注釈】嘆かす妻—逢い難いことを嘆いている織女星。このスは敬意が軽い。

○言だにも告げにぞ来つる—告ゲニは告ゲムトの言い換え。ダニはそのムに気分的に続いている。七月七日以外の夜のことを詠んでいる。

【大意】彦星は 嘆く織女星に 言葉だけでも かけようと思って来た 見ているだけだと辛いので

### ③講談社文庫（中西進）の解釈<sup>[3]</sup>

【注釈】彦星—男性の星。牽牛のこと。○妻—織女。

○言だに—現し身は来られないので、言伝でだけ、という空想。

【大意】彦星は、嘆いておられる妻に、せめてことばだけでもと告げに来た。見ていると苦しいので。

### ④日本古典文学大系の解釈<sup>[4]</sup>

【注釈】言だにも—せめて言葉だけでも。○この歌、難解で諸説がある。→補注。

【大意】彦星は嘆いておいでの妻（織女星）に対して、せめて言葉だけでもと思って告げに来たのです。嘆きの様子を見ると苦しいので。

【補注】告げにぞ来つる 告げにのニを普通、助詞のニと解している。しかしこれを否定のズの連用形と見ることもできるのではないか。告げにぞは、告げずにの意と解するのである。その結果、「彦星は別れを嘆く織女星に、言葉だけでもかけずに別れて来た。織女星を見ると苦しいから」の意となる。一試案として記しておく。

### ⑤万葉集注釈（澤瀉久孝）の解釈<sup>[5]</sup>

【注釈】彦星は—「孫」の字、細と版本とに「彦」とあるが、元、類（3・23）、紀その他による。「孫」をヒコと訓むこと前（5・810序）に述べた。和名抄（二）に「孫」に「和名无麻古、一云比古」とある。

○歎かす妻に—「す」は敬語（1・1）。織女が逢へないで歎いてゐるのをいふ。

○言だにも告げにぞ来つる—「告尔」の「尔」の字、西、細と版本に「余」に誤る。元、類以下一致した訓であるが、童蒙抄にノレトゾ、新考に「告等<sup>ノラムト</sup>ゾ」、新訓にノリニゾと改めたが、「のる」と「つぐ」との相違は前(2・109、3・317)。に述べた如く、「事毛告良比」(9・1740)の一例があるが、「許登都磯夜良牟<sup>コトツグヤラム</sup>」(15・3640)、「許登都磯夜良武<sup>コトツグヤラム</sup>」(15・3676)などいずれもツゲムであり、「事太尔不告<sup>コトダニツグズ</sup>」(3・445)と同じく、旧訓により、「事」は「言」の意で、夫婦のちぎりを結ぶ事は出来ずとも、せめて言葉だけでも通じようとやつて来た、と解すべきである。従つてこれも七日の夜の事ではない。七夕の一年たゞ一度の逢瀬に対する惻隱の心が、いろいろの空想を逞しくして、かうした歌となつたのである。古典大系本補注に「告げに」の「に」を打消の「に」として「彦星は別れを嘆く織女星に、言葉だけでもかけずに別れて来た」といふ「一試案」を出してをられるが、打消の「に」はこの先にも「飽足尔<sup>アキタラニ</sup>」(2009)があり、そこでも述べるが、「にぞ来つる」などつつぐ例は無く、七夕の歌だから七日の夜の歌と解しようとするところからさうした案も出るのであるが、右に述べたやうに、人間世界の事に移した自由な空想歌と見ればよくわかるのである。

○見れば苦しみ一川をへだてて織女の歎いてゐるさまを見てみると苦しいので、の意。

【大意】彦星は歎いてゐられる妻に、せめて慰めの言葉だけでも通じようとやつて来たことよ。見てみると苦しいので。

【考】流布本赤人集に「ひこほしがうらむる妹が」「けふは苦しも」とある。

さて、上の五つの注釈書における第四句「告げにぞ来つる」の解釈について検討してみよう。注釈書③と④では、「告げに」の「に」を「～のために」という目的を表わす助詞と解している。このような「に」の用法は、例えば、

02/0158 山吹の 立ちよそひたる 山清水 汲みに行かめど(酌尔雖行) 道の知らなく

の歌における第三句「汲みに」の「に」と同じ用法であり、この点に関する限り、文法的にも特に問題はない。一方、注釈書①と②と⑤では「告げに」を「告げむと」(告げようと)と解し、助詞「に」を「目的」ではなく「意志」として解している。実はこの解釈には問題があり、これについては第3節で議論する。ここでは「告げにぞ来つる」の解釈として、③と④の「告げに来た=告げるために来た」という「目的」としての解釈と、①と②と⑤の「告げようとやつて来た」という「意志」としての解釈の間の「違い」については当面目をつぶることにする。

そうすると、歌の発句から第四句までの部分(結句だけは除く)の解釈は、①から⑤ともすべて「彦星は嘆く妻にせめて言葉だけでも告げようとやつて来た」となる。ここまでは特に問題ない。問題なのは、この部分と残された第五句(結句)「見れば苦しみ」との「つながり」においてである。「見れば苦しみ」は「見ると苦しいので」という意味である。このことは、これとほとんど同じ語構成の「見れば恋しみ」を含む次の歌の存在によって確かめられる([6]、p. 225)。

13/3224 ひとりのみ 見れば恋しみ(見者恋染) 神奈備の 山のもみち葉 手折り来り君

【大意】ひとりだけで見ているとあなたが恋しくてならないので、神奈備山の黄葉を手折って来ました、あなた。

そこで問題となるのは、「見ると苦しいので」という結句の内容と、「彦星は嘆く妻にせめて言葉だけでも

「告げようとして来た」という発句から第四句までの内容は、果してコンシステントに「つながる」かどうかという疑問である。この答えが「NO」であることは次の考察から明らかとなる。「見ると苦しいので」の「見る」は、言うまでもなく、「お互いに逢って対面した上で見る」ことを意味する。このことを念頭に入れた上で、上に示した二つの部分を、全体の意味を変えないように配慮しながら、語句を補い語順を変えて示すと次のようになる。

彦星は、嘆く妻に対して、お互いに逢って対面すると苦しいので、せめて言葉だけでも告げようとして来た

今日通説となっている①から⑤の解釈は、結局のところ、上のような解釈をしていることにほかならない。上の解釈を読むと、一見、何となく作者の気持ちがわかったような気になるかも知れないが、この内容をよく検討してみると常識的にありえない内容になっていることに気づく。それは「言葉を告げる」という行為が「お互いに逢って対面すること」を前提にしているからである。まさか「後ろ向きのまま」で顔を合わさずに言葉だけ告げるということはないだろう。だとすれば、「お互いに逢って対面すると苦しいので」という「理由」は、「言葉を告げるのはやっぱり止めよう」と思う気持ちの理由にはなり得ても、「せめて言葉だけでも告げよう」と思う理由にはなりえない。よって、上に示した通説の解釈は、まともな人間の感情に反する内容となっているのである。もし通説の解釈が自然な内容になるとすれば、「見ると苦しみ」は「見ると苦しいので」と「理由」に解するのではなく、「苦しいけれども」と「逆説」に解さなければならない。しかし、「ミ語法」に「逆説」の用法はない（[7]、pp. 695-696）。

以上の問題点のほかに、通説の解釈にはもう一つ重大な問題点がある。それは1998番歌の内容と矛盾することである。これについては次節で検討することにしよう。

### 3. 新しい解釈の提案

前節でも述べたように、結句の「見れば苦しみ」は「見ると苦しいので」という「理由」の意を表わすことは疑いないから、この結句の内容と自然につながるためには歌の前半の内容は「告げようとして来た」ではなく「告げないで来た」でなければならない。すなわち、歌の内容が人間の自然な感情を表現したものであるためには、歌の内容は次のようになっているはずである。

彦星は、嘆く妻に対して、お互いに逢って対面すると苦しいので、（逢わないのはもちろんのこと）言葉さえも告げないで来た（通り過ぎて来た）

歌の内容がこのようなものであるためには、第四句「告げにぞ来つる」の「告げに」が「告げないで」という意味になっていればよい。すなわち、「告げに」の「に」が否定の意味であればよい。

実は、否定の助動詞「ず」の連用形は、一般に「ず」が用いられることが多いが、上代特有の用法として「に」が用いられることがある。一つ実例を示そう（[8]、p. 368）。

04/0589 衣手を 打廻<sup>うちま</sup>の里に ある我を 知らにそ人は（不知曾人者） 待てど来<sup>こ</sup>ずける

【大意】（衣手を）打廻の里にいる私を御存じなく、あなたはいくらお待ちしてもいらっしやいませんでした。

この歌の「知らに」はすべての注釈書で「知らないで」と否定の意味に解されている。ここでは「知らに」の「に」が否定の助動詞「ず」の連用形として用いられている。この例の存在は、これとほとんど同じ語構成をもつ「告げに」を「告げないで」と解することができることを保証する。しかも、今の例では「知らにそ」と「に」の後に係助詞「そ」が付いており、「告げにぞ」とそっくり同じである。ちなみに、万葉集中の否定の助動詞「に」の用例は、「知らに」が36例、「足らに」が1例（2009番歌）、「飽かに」が2例（3902番歌、3991番歌）である。こうした多数の用例があるにもかかわらず、澤瀉久孝氏は⑤の注釈の中で否定の助動詞「に」が「にぞ来つる」と続く例はないという理由から、「告げに」を「告げないで」と解する説を退けている。しかし例えば、「そこも飽かにと 布勢の海に 船浮け据ゑて」（3991番歌）の例では、「飽かに（と）」は実質的に「船浮け据ゑ（て）」という動詞に続いており、「告げに（ぞ）」が実質的に「来つる」という動詞に続いているのほとんど同じである。

以上のことから、歌の第四句「告げに」は「告げないで」と否定の意味に解せることが文法的に確かめられた。また、単に文法的に可能というだけでなく、似た用例が万葉集中にも多数あること、かつ歌の内容としても否定の意味に解する方が自然な解釈であること、などが明らかとなった。実はこの解釈は、第2節の④の「補注」にあるように、約40年前に日本古典文学大系が補注で「一試案」として提案したものである。ただし、この「一試案」では「言だにも 告げにぞ来つる」を「言葉だけでもかけずに別れて来た」と現代語訳しているが、「だに」は否定や反語の文脈では「～さえも」という意味になるから、「言葉さえもかけずに別れて来た」と訂正されるべきであろう。以下に、「告げに」が否定の意味であることを裏付ける新たな根拠を三つ示す。

まず第一に、2006番歌と同じグループの歌（巻十の「秋の雑歌」の「七夕」の題詞をもつ九十八首の歌）の中に次の歌が存在することである（[1]、p. 465）。

10/1998 我が恋を 夫は知れるを 行く船の 過ぎて来べしや 言も告げなむ

【大意】私の恋を夫は知っているのに、行く舟が通りすぎてよいものでしょうか。せめて一言でも言伝てを伝えてほしい。

この歌は、織女星の立場を歌ったもので、第二句の「夫」は彦星のことである。そうすると、この歌の内容から、彦星は妻の織女星に一言も言伝てをせずに通り返り過ぎて行ったことがわかる。なぜならば、もし一言でも言葉をかけたのであれば、織女星の歌の結句に「言も告げなむ」（せめて一言でも言葉を告げてほしい）などという表現が出てくるはずはないからである。したがって、この歌の内容は、2006番歌の第四句「告げにぞ来つる」を「告げないで来た」と否定の意に解してこそコンシステントになるのであり、通説のように「告げようと（思って）来た」という解釈とは矛盾する。

第二に、2006番歌の第四句は「告げにぞ来つる」となっており、係助詞「ぞ」によって「告げに」が強調されている。年に一度、七夕の日にはしか逢えない運命になっている彦星が、もし妻の織女星に言葉を「告げよう」と思って来たのであれば、あまりにも当然の行動であり、「告げる」という行動をわざわざ係助詞を使って強調する必要はない。ところが、もし彦星が一年に一度しかないチャンスと知りながらあえて妻の織女星に言葉を告げないで来たのであれば、「告げないで」の「ないで」という否定部分を強調する必然性が生まれる。実際、「告げにぞ来つる」の係助詞「ぞ」は否定の「に」に接続して「告げないで」の「ないで」という否定部分を強調している。したがって、「告げにぞ来つる」を現代語風に訳すとすれば「告げないで来た」のように否定を表わす「ないで」の部分に強調の傍点を打つのが的確な訳だと言えよう。よって、第四句「告げにぞ来つる」の「に」の後の係助詞「ぞ」の存在は、この「に」が否定を表わす助動詞

の連用形であることを間接的に裏付けていると言える。

第三に、2006番歌の第三句「言だにも」の「だに」という助詞の一般的な用法から、第四句の内容が「否定」の意味である可能性が高いことが示される。このためにまず、『時代別国語大辞典 上代編』の「だに」の説明を見てみよう（[7]、pp. 433-434）。

文中にあって、主として体言（あるいはそれに助詞ヲ・ニ・ノミなどがついたもの）に接し、すべてを譲った最小限のものや状態を指示し、それ以外を暗示する。ダニの使われた句の述語は、意志・命令・願望・仮定か、否定・反語の表現であることがほとんどである。前者の場合、せめて～だけでも～なりと、と訳すことができ、後者の場合、～さえと訳せる。

ここで注目したいのは、上の説明の中の下線部、すなわち「だに」という助詞の一般的な用法である。2006番歌の第三句と第四句は「言だにも 告げにぞ来つる」であるが、「言だにも」の「だに」が掛かるのは「告げに」であるから、上の下線部の「だに」の一般的な用法に照らして考えると、「だに」が掛かる「告げに」という部分は「意志・命令・願望・仮定か、否定・反語」のいずれかの表現でなければならない。この中に「否定」の表現が含まれているから、「告げに」を「告げないで」と「否定」の意味に解釈することは「だに」の一般的な用法に反しないことがわかる。

ところで、第2節に示した五つの先行研究のうち、③と④の注釈書では「告げに」の「に」を「目的」を表わす助詞と解し、「告げに」を「告げるために」の意と解している。しかしこの解釈は「だに」の一般的な用法に反する。なぜならば、「だに」の掛かる「告げに」は「意志・命令・願望・仮定か、否定・反語」の六つの表現のうちいずれかでなければならないが、「目的」は上の六つの表現の中に含まれていないからである。この問題に関連して、③と④は「せめて言葉だけでも告げに来た」と「に」を単なる「目的」と解したのでは意味が不自然となるために、「せめて言葉だけでも（思って）告げに来た」のように、歌には存在しない「と（思って）」を補って無理に現代語訳をしている。

一方、⑤は「告げに」を「（言葉だけでも）通じようと」と「意志」を含めて解し、また①と②は「告げに」という表現は本来は「告げむと」であるが字余りを避けるために「むと」を「に」で言い換えて「告げに」と表現したものとす。もしこれらの主張が正しいならば、すなわち動詞の連用形に接続する助詞「に」に「意志」を表わす機能があるならば、①や②や⑤の「告げに」に関する解釈は「だに」の一般的な用法に反しない。「だに」が掛かるべき六つの表現の中に「意志」が含まれているからである。

ところが、助詞「に」に「意志」を表わす機能があるかどうかは大いに疑問である。そこで『時代別国語大辞典 上代編』（[7]、pp.540—541）の助詞「に」の用法について調べてみた。「に」の機能の中には、③と④が採用している「資格あるいは目的をあらわす」機能はあるが、「意志」を表わす機能は見当たらない。そこで「に」に関して示された多数の例をすべてチェックしてみたが、「意志」を表わすと思われる例はひとつもない。また、『岩波古語辞典』（[9]、pp.1488-1489）の巻末の「基本助詞解説」の「に」を調べてみたが、やはり「意志」を表わす機能はない。したがって、①と②と⑤の主張、すなわち「告げに」は「告げむと」の意であるとする主張の「根拠」には疑問をもたざるを得ないのである。もしこの主張が正しくないならば、「だに」の一般的な用法に反することになる。

このようにして、2006番歌の第四句の「告げに」が「告げないで」という「否定」の意味であることの妥当性は、第三句「言だにも」の中の「だに」という助詞の用法の一般論からも導かれる。

#### 4. おわりに

この論文では、万葉集の巻十の「七夕」に関する2006番歌の解釈について、特に従来から問題のあった第四句「告げにぞ来つる」の部分に焦点をあてて再検討を行ない、次の結論を得た。第一に、これまでに広く行なわれてきた解釈はいずれも歌の内容の面だけでなく、文法的な面においても問題があることが明らかとなった。第二に、この歌の適切な解釈は、日本古典文学大系が「補注」において提案した「一試案」、すなわち「告げにぞ来つる」の「に」を否定の助動詞「ず」の連用形と見て「告げないで来た」と解するものである。以上、本論文で得られた結論が妥当なものであるかどうか多くの方々のご批判をおおぎたい。

#### 5. 参考文献

- [1] 「万葉集 二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 467、2000年。
- [2] 「万葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 77、1995年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注 (二)」、中西進、講談社文庫、p. 341、1980年。
- [4] 「万葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 90-91、p. 462、1960年。
- [5] 「万葉集注釋 卷第十」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 226-227、1962年。
- [6] 「万葉集 三」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 225、2002年。
- [7] 「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。
- [8] 「万葉集 一」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 368、1999年。
- [9] 「岩波古語辞典 補訂版」、岩波書店、1990年。